

# 行動の形成と統制（1）

## Formation and Control of Behavior (1)

森 口 訓 孝

個体の内的な欲求は、外界からの刺激とどのような関係を保っているのでしょうか。われわれは、外界からの刺激にまったく支配されてしまっている意志のない機械であるというふうに、われわれ自身を考えることは極端に過ぎる。といっても、われわれは、外界からの刺激にまったく影響されないで、自由に自分自身の意志のままに生きていくことのできる全能な主権者であるというふうに、自分自身を考えることもできない。われわれの欲求や行動は、外界の状況や外界からの刺激とどのような関係を保っているのでしょうか。

### 1. 行動の仕組み

われわれは、内的な生理的状态、その時その時の身体的欲求にもとずいて摂食行動を行なっているのか、という点について Young, P. T. ら（1945, 1946, 1947, 1959）は、ラットを用いて特殊飢餓の実験を行なった。蛋白質剝奪餌やビタミン剝奪餌で餌育されたラットは、カフェテリアの中に置かれると、蛋白質やビタミンを選択することができる。しかし、もしもそのカフェテリアで、ラットはサッカロースを食べることを学習していると、欠乏しているものを選択することはできず、サッカロースを食べてしまう。このことと関連して、八木（1970）は、習慣の強弱と内的な欲求とがどのように干渉しあうのかを検討した。

人間の食習慣もある程度これと似ていて、食習慣や好みによって偏食するということが起こる。われわれが快と感じるものは、必ずしも生命維持に必要なものと常に同一であるとは限らない。サッカリンは栄養価が全くないけれども、ラットやわれわれにとって甘味の快を生じるし、喫煙や麻薬嗜癖はわれわれにとって有害であるにもかかわらず、快を生ぜしめることが有りうるのである。

#### a. 動因と誘因、一次性と二次性

有機体は、飢餓感にかられて食物を探し求めたり、恐怖感にかられて何とか安全を確保しようとしたりする。従来の伝統的な心理学の行動理論は、主としてラットの条件反応的な行動に基づいて、行動の原理を構築していこうとしていた。まず基本的な一次性の、生命維持にとって不可欠な行動原理というものがあり、それを基礎として、二次性の個体的な経験が学習されると考えられた。

#### b. 二次性のもの、たとえば愛着

新生児や乳児は、いろいろと世話をしてもらわなければ生存することすら困難である。それは、通常は母親によって行なわれるであろう。ともかくも、乳児は自己の基本的な欲求を満たしてくれる者に対して、もっとも愛着を示すのであろうか。この点について、通常は確かに生理的欲求を満たしてくれる者に対して、もっとも愛着を示すといえる。しかし、実験的に調べてみると、必ずしもそうとは言えないのではないかと考えられている（波多野、稲垣 1973, 1977）。

母親は、かなり不愛想に赤ん坊に授乳ををするとする。もう一人の人物がいて、その人は、赤ん坊の生理的要求を満たすようなことは何一つしないけれども、赤ん坊をさかんにあやしたり、赤ん坊の表情を読み取って話しかけてやったりとする。そうすると、赤ん坊は、母親か、それとももう一人の人物か、いずれに愛着を示すだろうかというのである。これについては、おそらく後者であろうといわれている。

従来の学習理論では、まず基本的な一次性の、生命維持にとって不可欠なものが学習されて、それを基礎として二次性のものが学習されると考えられてきた。しかし、二次性のものが、一次性のものとは別に、学習されることもありうるのではないかと考えられる。たとえば、人間における社会的欲求、社会的動機づけとして知られる承認や親和の欲求、あるいはその行動は、必ずしも基本的な生理的欲求に基づいた行動を基礎として、その上に派生するものとは考えられないのではないだろうか。

従来の学習理論は、パプロフ（Pavlov, I. P. 1927）、ソーングイク（Thorndike, E. L. 1911）、トールマン（Tolman, E. C. 1932, 1948）、ガスリー（Guthrie, E. R. 1952）、ハル（Hull, C. L. 1943, 1952）、スキナー（Skinner, B. F. 1938, 1953）らによって作られたが、彼らは主に動物を用いて研究をしたので、その学習行動は摂食行動や電撃回避行動などに重点が置かれていた。しかし、人間の場合の行動の主な原因は、このような身体的生理的動因であるとは必ずしも言えない。

動物に比べると、人間の行動の動因は、比較的、社会的動機づけによることが多いのではないだろうか。つまり、人間は社会的承認を得ようとしたり、社会的否認を避けようとしたり、あるいは、親和への欲求が働いて行動することが多いと考えられる。

すなわち、人間の行動は、身体的生理的に有利な行動が選ばれているばかりではなく、社会的心理的に有利な行動が選ばれているのであり、両者は必ずしも一致しているとは限らない。また、人間の場合、いずれかが常に基本的一次的なものであり、どちらかが常に二次的派生的なものであるとは言えないように思われる。

## 2. 外界と個体

新生児や乳児は、ヒト、通常、親の世話を受けなければ生きてゆけない。しかし、やがては親から離れていこうとする。第一反抗期や第二反抗期は、それを示しているともいえる。やがて個体は独立しようとするのである。しかし、われわれはどんなに生長しようとも、外界に依存しないでは生きていくことが難しい。われわれは、ある意味ではその生涯を通じて独立と依存の矛盾をくりかえすともいえる。

### a. 微笑みと追従

乳児は、生後しばらくすると、ばくぜんとした微笑のような表情を示すことが知られている。それは、初めのうちは外界の何かに向かって微笑みかけているというよりも、内的に自発する生理的な過程と考えられている。しかし、やがてそれは外界の何か、生物、無生物を問はない何かに対する反応のようなものとなり、さらに、その反応は成長して、ヒトの顔、もしくはヒトの顔のパターンに対する反応となる (Fantz, R. L. 1961)。

生後数カ月の赤ん坊が、ヒトの顔のパターンを凝視することはよく知られている。他のどのような刺激パターンと比較しても、比べものにならない。乳児は、ヒトの顔に対して反応するような仕組みを生得的に持っているのであろう。一方、アヒルのヒナは親鳥に追従して歩き、追従して泳ぐことはよく知られている。

アヒルのヒナに、孵化後間もなく動くものを見せると、それを追従することは刻印づけ (imprinting) と呼ばれている。アヒルのヒナは、それほど強く親鳥に依存していなければ生きていけないのであろう。乳児もまた、まったく身体を移動させる能力は無くとも、外界に対して依存し、追従していこうとすることを、微笑みによって示しているとも考えられる (岩下 1975)。

### b. 分離不安

乳児は母親が離れていって見えなくなると、不安を感じるのであろう、泣くようになる。また、母親に抱かれている時など、見知らない人がのぞきこむと、不安を感じるかのように母親の胸の中に隠れこもうとする。そして、やがて運動能力が少し発達してきて、這ったり、よちよち歩きをすることができるようになると、いつも母親の

後をくっついて動くようになる。ハーロウ (Harlow, H. F. 1961) の実験でも、サル  
の赤ん坊はいつも布製の代理母親に抱きついていることが示された。このような状態  
にある赤ん坊は、自己と母親が一体化しており、母親と未分化のような状態にあると  
いってよいだろう。

### c. 分離、個体化過程

人見知りをしていた赤ん坊も、やがて、見知らない人の顔を見てもあまり不安を感じ  
なくなり、むしろしげしげと興味をもって見つめるというような反応も現われてく  
る。見なれないものも、何度か見ているうちに不安は減少して、好奇心に変わってい  
くという場合もあるだろう。

しだいに運動能力も増大し、分離不安も減少するのであろうか、やがて赤ん坊は、  
自分から母親を離れて好奇心のおもむくままに歩き回るというようなことをするよう  
になる。このようにして赤ん坊は、しだいに自分を母親から分離して意識するよう  
になるのであろう。

しかし、一たび不安を感じると、赤ん坊はただちに母親のところにもどって来て、  
母親に抱きつくという行動をとる。このように、分離不安は無くなったというのでは  
なくて、子供はその後、母親から離れたり、接近したりという行動を長い間くり返す  
のである。Harlow, H. F. の実験でも、子ザルは、クマのおもちゃが太鼓をたたきなが  
ら歩き回るというような驚きや不安の状況に出会うと、いそいで代理母親のぬいぐる  
みのところへもどってきて抱きついたのであった。

どのようにして分離不安が無くなっていくのかということは、興味のある問題であ  
るが、第一反抗期、第二反抗期などと呼ばれるものは、子供の依存と分離の間の葛藤  
を示すものとも見るができるだろう。このように子どもは、何度も心理的離乳を  
くり返し、母親から独立して行こうとしているとも言える。子どもが、どのようにし  
て母親から分離していくのかということは重要な問題であり、また、日本人の甘えの  
問題とも関係のある事がらであらう。

## 3. 情報の制限

子どもの教育は、なんでもよいから多くの刺激を与えた方がよいというわけではな  
いが、外からの刺激が少ない施設児の場合や、サルを箱の中に閉じ込めたり、ヒトを  
部屋の中に閉じ込めるような実験など、心の働きの上に多くの障害や問題が生じてく  
ることが知られるようになってきた。

### a. 孤児院の乳幼児

孤児院や施設で育てられた子どもが、あまりかまってくれる人もなく、壁も天井もシーツも白いような部屋で、ただ寝かされているというような状態が続いていると、刺激が少なくて精神の発達に遅滞をきたすということは知られている。しかし施設であっても、カラフルな壁やカーテン、おもちゃや遊具などにとり囲まれていて、しかも、赤ちゃんの行動によく応答してくれる人がいる場合には、このような精神の発達の遅滞は起こらない。精神の発達にとって、外からの刺激は不可欠なものなのであろう。

ヨーロッパのある城の地下牢のようなところで、閉じ込められて育てられ、人とほとんど接触することも無かった子どもは、発見され救出された時には、白痴のような状態であったといわれている。

#### b. 情報の制限と感覚遮断

サルを箱の中に閉じ込めると、サルは箱の外をのぞくために、きわめてしばしば窓を開けて外を見ることが知られている。そのさい、外に見える物が新奇なものであると、その回数は増大し、外に見えるものが、たとえば嫌いな犬などであると、その回数は減少する。サルが好奇心から外をのぞこうとするのか、不安にかられて外をのぞこうとするのかは、多少ははっきりしない面もあるが、しかし、サルが外からの情報を求めていることは確かであろう。われわれもまた、外からの情報を求めているといってよいだろう。適切な情報は、われわれの心、好奇心、探究心などにとって良き栄養を与えるものと言えるであろう。

視覚、聴覚、触覚が遮断されて、外界からの情報がきよくたんに制限された場合に、われわれの精神の活動に異常が起こることは、ヘップ (Hebb, D. O.) やヘロン (Heron, W. 1961) らの実験で明らかにされた。また、サルの赤ちゃんを母親や仲間から全く隔離して一頭だけで育てると、異常な行動を示すようになり、生殖行動や育児行動にも異常が見られるようになるということが知られている。

また、乳児にごく短期間一週間ほど、眼帯をかけて視覚を遮断すると、その後視力はきわめて低下し、弱視状態となり、それは修復困難であることなども知られている。われわれは外界からの刺激を受容することによって、成長発達するのであり、また、精神機能を正常に保つことができるのである。

#### 4. 情報の量、情報の内容

外界からの刺激の量は、ある限度以下になると、われわれは不安を感じたり、また好奇心が飢えを起こすともいえる。また、きよくたんに遮断されてしまうと、われわ

れの精神の働きは、たちまちにして異常を起こす。

このことは、ある限度以上を越えた場合にも同様であって、外界からの刺激の量がある限度以上になると、われわれの心身の働きにきわめて悪い影響をもたらすことはよく知られている。また、きよくたんに大になると、われわれは耐えられないのである。したがって、われわれは、外界からの刺激、情報を求めると言っても、それは、ある適切な量の範囲の中であるということになる。その範囲内において、情報はわれわれの知的探究心にとって不可欠のものであるといえよう。

情報の内容については、われわれは陳腐な情報を好まないが、しかし、あまりに新奇な情報に対しては怖れを抱く傾向をもっている。情報の内容が、情報の受け取り手の考えと異なる場合、その人はその情報に接触したがいらないし、嫌悪したり、不安を感じてそれを受け入れようとしない傾向を示すことが多い。しかし、内容によっては怖れではなく、強い関心、興味、好奇心が触発され、何度もその情報に接触してそれを確かめ、それについて検討しようとするであろう。

サルは、サルの首のトルソー、あるいは麻酔をかけられた仲間のサルを突然見せられると、大変な情緒的混乱を示した (Hebb, D. O. 1958)。それは不合理、不可解な情報であるからであろう。赤ん坊は、母親が見なれない大きなおもちゃのメガネをかけたり、作り声を出して話しかけるとこわがる。しかし、これを何度かくり返しているうちに、むしろこれを喜び、またやってほしいというように好奇心を示すようになる。

## 5. 刺激と自己コントロール

新生児は、まだ母親の胎内にいるかのような姿勢をとり、外界からの刺激に対してあまり反応をしない。外界からの刺激に対して保護されており、クッションをかぶっているかのようなのである。自己の生理的状態にしたがって微笑んだり、泣いたりしているようである。ある意味では、このような保護された状態は有機体の理想的な状態であるともいえる。

ある有機体の個体が、この世界に発生すると、その個体は生涯を通じて外界に適応し、外界からの刺激にいかに対応するかを学習する。自己を顧み、自己が何であるか、自己が如何なる状態にあるかを意識することは、人間においてもそう多いとはいえない。

宝塚の別所彰善は、鏡を見て自分の顔つきのすざましさに驚き、毎日鏡を見て笑うけいこをし、独特の精神療法を作った。自己暗示療法、自律訓練法、漸進的弛緩法、あるいは禅やヨガなども、自己の心身に目を向けさせる精神療法とみることもでき

るのである。あるいは、これらの方法は外界からの刺激に対して、何がしかのクッションをかぶせようとしているともいえるのである。睡眠中に、われわれは外界からの刺激に対して閾値が上昇するけれども、はっきりと覚醒した状態で、意識的に自己をこのような状態に誘導する方法ともいえるであろう。トランキライザーもまた、このような作用をもっていると考えられる。

#### a. 漸進的弛緩法

自己の心身をコントロールすることは、必ずしも容易ではない。アメリカのジェーコブスン (Jacobson, E. 1938) は、習慣化した緊張、残留緊張を取り除いて漸進的に完全弛緩に至る方法を考案している。漸進的弛緩 (progressive relaxation) においては、まず、弛緩はそれだけを得ようとして努力してもうまくいかないのが、緊張、筋緊張、体操などののちに弛緩を得るようにすすめている。自己身体像、自己像についての感受性を高めるように瞑想し、四肢の力を抜き、身体の重い感じ、温かい感じを得るように努めるのである。これは、一種の心理的アンマであるとも考えられており、イメージによる練習、訓練である。

こうすることによって、骨格筋は実際に十分に弛緩し、四肢に重感が生じ、わずかに四肢の体温は上昇するらしい。そうすると、心臓や動脈を含む自律神経系を自分自身で間接的にコントロールすることができ、大脳皮質の働きは安定し、精神的な安定が得られるという。このような方法は、身体の状態を調えることによって、心の状態を調えるという方法をとっている。

#### b. 不安

われわれは、外界から疎外され、隔離されてしまうことに不安を感じるとされている。新生児は、生まれながらにしてヒトの顔のパターンを凝視し、それに微笑みかけるのであり、それはヒトと接触しようとしていると考えられる。

われわれは、外からの刺激や情報に強い関心を示し、それを積極的に追求し、その結果、それからの影響を強く受け、それらによって支配され、時には自分自身を見失ってしまうことにもなるのである。ドイツのシュルツら (Schultz, J. H. & Luthe, W. 1969) の自律訓練法なども、自己自身に注意を払い、自己自身から生じている信号に目を向けることをすすめているのである。

## 6. 学習理論

行動が、どのようにして形成され、変容していくのかということを取り扱う学習理論の中で、最近まで主流を占めていたのは強化理論であった。行動を統制する上でも

っとも大きな働きをもつものは、強化であるということは、かなり一般的に認められる事実であろう。しかし、もしも強化が無くなれば、条件づけられた反応は消去してしまうのであるとすれば、強化の効果はかなり限定されてしまうことになるであろう。

#### a. 強化理論

1950年以降、この30余年の間で、心理学における行動の分野で、もっとも注目を浴びた心理学者の一人は、スキナー (Skinner, B. F.) であろう。スキナーの理論は、基本的には強化理論で、パブロフやハルの理論と共通したものをもっている。しかし、ハルの場合には、理論構成に偏ったきらいがあるが、パブロフやスキナーの場合には、人間の行動の問題とのかかわりをきわめて重視した。

たしかに、行動をコントロールする上で強化は重要な働きをするであろう。しかし、強化が強化としての機能をもつためには、適切に動機づけられていなければならないのである。

動物実験において、動機づけるということはきわめて容易に行なわれており、また、人間の学習実験においても、教示することによって容易に動機づけることができるけれども、しかし、人間の日常生活の中で適切に動機づけるということは容易なことではないのである。

#### b. 認知理論

強化理論では、行動が変わるという点に重点が置かれているのに対して、認知理論では、考え方が変わるという点に重点が置かれている。行動主義心理学では、客観性という点をきわめて重視するが故に、認知や考え方というようなものは意識心理学上の問題として軽視された。しかし最近になって、心理学の分野に情報理論がさかんに取り入れられるようになると、認知の問題は重要視されるようになり、しだいに認知理論は注目されるようになった。

認知理論と強化理論のいずれが重要かというような問題は、すでに長い論争が行なわれたにもかかわらず、はっきりした結論に至っていないが、もし、われわれの行動が変化するとするならば、まず考え方が変わって、そしてその後で行動が変化するのであるとも言えるわけで、認知の問題を軽視することはできないであろう。

#### c. 強化理論の問題点

強化がある限りでは行動は変容しうが、強化が無くなると、その行動は元に戻ってしまうのであろうか。この点については、消去は元に戻ってしまうのではなく、ただ行動が現われないだけで、抑制されているにすぎないとされている。しかし、人間の実際の行動を問題にする場合には、たとえ抑制されているとしても実際に現われない



ければ、条件づけの効果が無かったのも同然ということになる場合もあろう。

人間は、ほめられるとやるが、ほめられなければやらなくなるというのでは、強化は、行動を形成するためのあまり強力な武器とはいえないかも知れないのである。

d. 報酬や罰。不安や好奇心

動物を訓練するには、たしかに強化は有力な武器であろう。報酬や罰が与えられるならば、動物にも多くのことを訓練することができる。さらに、報酬や罰を直接与えなくても、例えば、罰を与えるかわりに、ムチをふりあげるだけでその効果は十分な場合もあるだろう。また、実際に報酬を与えるかわりに、ニンジンをつかせたり、はげましたりするだけでその効果は十分な場合もあるだろう。

近年、動物にも恐怖心や好奇心があつて、それを利用すれば何かを学習させたり、訓練したりすることができるということがわかってきた (Miller, N. E. 1948, Harlow, H. F. 1950)。まして人間において、実際に直接、罰や報酬を与えて訓練したり、学習させたりするということは、あまり望ましいことではないのではないかという疑問も生じるのである。しかし、だからといって、恐怖心や好奇心を利用して学習させる方が、より望ましいのかどうかという点については、なお検討しなければならないであろう。

e. 機能的自律性

強化によって、ある程度行動が条件づけられ、その行動が習慣化した後には、強化が無くなっても条件づけられた行動は消去しないということは、まれに起こることであるらしい。この現象を、オールポート (Allport, G. W. 1937) は、機能的自律性 (functional autonomy) と名づけた。

動物が餌を獲得するために走路を走ることを学習し、それが習慣化した場合には、餌が与えられなくなっても消去が起きないことがあるのかということについては、多分に問題があるだろうと思われる。しかし、賞罰によって条件づけられた子どもの学習行動が、しだいに賞罰とは関係なく、学習行動それ自体に興味を持つようになるというようなことは起こりうることであろう。

f. 行動に基づく淘汰

Skinner, B. F. によれば、キリンの首はなぜ長いかというと、初めのうちは長いから短いまで正規分布するような形で存在したが、長い首の方が高い木の実を食べられるので、それだけ有利であり、飢餓のさいに長いだけが生き残ったのではないかという。行動も同様で、生存に有利な行動、あるいは、そういう行動を所有する個体が生きのびていくだろうという。

しかし、それは必ずしも社会的には望ましい行動とは限らないので、社会的に望ましくない行動は社会的に規制されるであろう。

## 7. 強化, 快, 不快

機械は、それを熟知することによって意のままに動かすこともできよう。ヒトも動物も、それらを機械とみなすことも可能であろう。動物は、それを熟知しなくても動因をコントロールし、強化を用いることによって、意のままに動かすこともできるであろう。しかし、有機体について、動物について、どんなに沢山の知識が集積されても、その個体の意志はコントロールしにくいという場合もあるように思われる。そういうことは、人間について考えるとなおさら生じやすいことではないかと考えられる。

### a. 強化, 評価

強化や評価は、動物や人間の行動を変えられることができる最大の武器の一つかも知れない。罰せられたり、ほめられたり、おどかされたり、はげまされたりしながら、われわれは行動を修正していくことがある。しかし、それらは個体にとって必ずしも同じ効果をもたらすとは言えないのである。

ある個体は、罰せられることによって、その行動を行なわないようになるが、ある個体はその行動を行なうようになることもある。暴力映画を見せることによって、ある個体は暴力的なことをするようになるが、ある個体は暴力的なことをしないようになるのである。同じ刺激であっても、その効果は個体によって異なるのである。

### b. 強化や評価は逆の効果

強化や評価は、必ずしも行動を強化するとは考えられない場合もある。外部からの刺激によって、学習者はかえって自発性を失ない、学習意欲を失ってしまうということも起こるのである。

あるいはまた、強化の有るときだけはやるが、強化が無くなるとやらないということも起こるのである。そのことは、すでに条件づけの過程で示されていたことでもある。条件づけにおいては、強化があると条件反応は生じるが、強化が無くなれば条件反応は生じなくなるのである。

### c. 接近の意味

学習理論の中で注目されたものとして、強化説、認知説、接近説などがあった。CS, US, CR などの時間的, 空間的な接近, 物理的な接近が、条件づけにおいて、あるいは学習において重要な働きをすることがある。しかし、人間の行動の場合には、この条件は重要な働きをする場合もあれば、しない場合もあるのである。なぜそのように、

その効果は異なるのであろうか。おそらく、学習者の関心や注意がかかっているのであろうと考えられる。

d. 強化のパラドックス

条件づけや学習において、全系列強化よりも間欠強化の方が強化効果が大きいということは、一つの注目された事実であった。毎回強化するよりも、たまに、あるいはたまたま強化する方が、強化の効果は大きいのである。人間は、強化が無ければ行動しないのであろうか。たしかに、そういうこともあるだろう。

しかし、人間は行動することそれ自体に興味を示し、行動することそれ自体によって強化されることもあると考えなければならない。そういう場合に、外から刺激を与えて強化するということは、かえってその行動に対する興味や関心を阻害し、自発性ややる気を失なわせてしまうものとして、強化が働くことにもなることがあるだろう。

e. 行動それ自体が報酬

ソーンダイク、ハル、スキナーら、学習心理学の代表的な研究者は、行動は、目標を獲得するための道具、手段であると考えた。そして、行動それ自体の報酬価については、あまり関心を払わなかった。しかし、サルはパズルを与えられると、長時間それをいじりつづけ、何ら報酬を与えられなくても、一日ごとにパズルを解く時間は短縮していったのである。サルにおいても、行動それ自体に熱中するということが起こるのである。このような好奇心、ないしは探索行動は、ラットにおいても認められている。

ラットは新しい迷路の中へ入れられると、ただちにその中を探索し始める。また、テコを押すと光が点滅するなど、外界が反応に対して応答的であると、その反応をくりかえすのである。ましてや、人間の場合には、行動それ自体に興味や価値を見出すということは、しばしば起こりうることなのである。

f. 漸次的近似化

スキナーは、条件づけの方法、行動形成の方法として、漸次的近似化 (successive approximation)の方法を提唱した。この方法では、最初は規準を甘くしておいて、多少でも目標とする行動に似ているところがあれば強化する。そして、しだいに目標とする行動とよく似ている行動でなければ強化しないという方法をとって、行動を目標行動に近づけていき、最終的には、目標とする行動しか強化しないという方法である。

オペラント条件づけの方法としては、この方法がもっとも注目されており、普通一般にこの方法が行なわれているけれども、人間の行動形成の方法としては、場合によっては必ずしもこの方法が最良であるとはいえない場合もあろう。最初からきびしい

規準を設けて、それを適用しなければならない場合もあり、教育の方法としても、両方式の比較検討が行なわれなければならないであろう。

#### g. 快, 不快

強化理論の立場をとった心理学者たち、なかでも、もっとも有力な理論家の一人であった Hull, C. L. の動因低減説によれば、動物や人間の行動は、いわば不快や欠乏の痛みを避けるためのものであった。これに対してフロイト (Freud, S. 1926) や、学習心理学者マウラー (Mowrer, O. H. 1950) らの説は、動物や人間の行動は、快を求めて行なわれているというヘドニズム (hedonism) の考え方をとっている。

動物や人間の行動は、欠乏や痛み、あるいは不快や不安を取り除くために行なわれるものなのだろうか。それとも、快や喜び、あるいは希望や良い期待を獲得するために行なわれるものなのであろうか。不快と快は、まったく相反するものであり、不安と喜びもまた相対立するものではあるが、しかし、それらの相対立する感情も、中間のところで、どちらでもないという感情があって連続しているように思われる。

また、われわれの行動も、不快を逃れようとしているのか、快を求めているのかを明瞭に区別しにくい場合もある。

#### h. 快と生理的欲求

ハルたちは、生理的欲求を満たすこと、一次性的動因が低減されることと快とを、ほぼ同一と考えた。たしかに、そのように快を一次性的な基本的な生理的状態の変化というふうに考えると、快をある程度客観的に定義することもできるのであろう。

しかし、快は本来、主観的なものであり、二次性的のものであるという考え方もできるのである。あるいは、もっと極端な言い方をすれば、快は生理的状態、あるいは一次性的のものとはまったく関係のない主観的な意識状態であり、二次性的のものであるということもできるのである。また、一次性的のものが満たされると、二次性的のものも満たされるとは限らないのであり、一次性的のものと二次性的のものとは、まったく別のものであるとも考えられるのである。

### 8. 内的なものと刺激

われわれの生活や生活のリズムは、遺伝的なものや過去の経験によって形成せられたものであるが、外からの強い刺激が加わると、それは変形する。遊びや夢は、本来内的な欲求に基づいて生じるものであろうが、外からの強い刺激によって遊びは減少したり、夢はむしろ増大することがある。欲求の解消は、現実の生活の中で満たされないと、夢の中でそのエネルギーが解消されるのかも知れない。

われわれの行動は、外からの刺激が加わらなくても、好奇心、探究心、探索、向上心、達成動機などによって内発的自発的に引き起こされる。また、それは何ら外にある対象の獲得を目標としないような遊びや、夢を見るというような行為であることもあろう。われわれには、内的に、遺伝や過去の経験によって作られた変化発展していくプログラム、つまり発達のプログラムがあるものかも知れないが、それに対して外からの刺激がそれと干渉しあう、そのような外からの刺激を教育と呼ぶこともできるであろう。

a. 夜行性と飢餓に基づく活動性

動物の活動性の日周期リズムを研究した八木(1961)や森口(1965)の研究によると、もし給餌を1日1時間一定の時刻に行なうと、動物の活動性は給餌直前の1~2時間に異常に大きくなる。しかし、もし給餌を制限しないで常に餌を十分に与えている場合には、夜行性の活動の日周期リズムが現われている。

動物もまた、飢えていなくても活動はするのである。外界からの刺激が与えられていなくても、動物もまた、外界に対して積極的な働きかけを行なっている。動物やヒトは、特に行動の目標は無くても行動はするのである。それは、まったく無意味な行動というよりは、むしろ活動することそれ自体を必要とするのであり、また、ときには情報を求める行動といってもよい場合もあるだろう。

遊びもまた、ときにはそういうものであり、夢もまた、意識の中でのそのような活動ともいえる。それは無意味なものというよりも、われわれが活動することが必要であるように、意識の中でも欲求の解消が行なわれるような活動が行なわれるのであろう。

給餌直前に示される活動量は、夜行性の活動量に比べるとかなり大きい。動物における活動も、飢餓状態でなくてもそれは引き起こされるのではあるが、しかし、外から与えられる強い刺激によって大きな影響を受けるということができる。

b. 遊び、夢

動物やヒトの遊びは、本来目的のないものであろうが、外からの刺激によって強制されているというよりも、内的な欲求の解消の過程とみることができよう。しかし、それは日常の目的行動とまったく関係がないわけではなく、ときにはその再現であったり、練習であったりすることもあるだろう。ことに、ヒトや高等な動物の場合には、遊びの中にも日常生活のリハーサルのようなものが含まれていることがあるように思われる。

c. 好奇心、向上心、達成動機

古典的な学習心理学, その中でももっとも有力であった強化理論が主張したように, 学習が強化によってコントロールされると考えるのは, やはり一つの見方にすぎないと思われる。自発的な内的な欲求として, 好奇心, 探索心, 探究心が, 行動をかりたてている場合もあるだろう。また, そのような心的欲求がかなりいつまでも持続するとすれば, それは向上心であったり, あるいはまた, 達成動機と呼ぶべきようなものであると思われる。

#### d. 内的な欲求と外界からの刺激

われわれには, さまざまな欲求が遺伝的に与えられており, また経験的に形成されると思われる。遺伝的に与えられている欲求には, 基本的な生理的欲求, 一次性的欲求がほぼ対応すると考えられる。それに対して二次性的欲求は, 経験的に形成されたものが多いであろう。このような内的な欲求と対応するものとして, 外界からのさまざまな刺激があると考えられる。

われわれが, すでに内的に獲得しているものと外界からの刺激とは干渉しあうものと考えられるが, 内的なものが外界からのものによって変形されるかされないかは, 内的なものと外的なものとの相互の間の内容の関係によって決まると考えられる。われわれは, 常にある程度新しい情報を求め, 自らを変形しようと試みているといえるのであり, 欠乏や痛みが生じなければ行動しないというわけではないだろう。

### 結 語

個体と外界とは, どのような関係を保っているかという点について, 考慮しなければならない重要な問題があるように思われる。外界からの刺激  $a$  は, 個体 1 に対しては, 行動  $A$  を生じせしめるが, 個体 2 に対しては, 行動  $\bar{A}$  を生じせしめるということが起こりうるのである。暴力的な映画を見た個体 1 は暴力的行為をする方に傾くが, 個体 2 は暴力的行為をしない方に傾くということが起こりうるのである。この点については, 刺激  $a$  が個体 1 と個体 2 の中で喚起せしめるものが異なるかも知れないということを考慮しなければならないだろう。

われわれは, 自分自身の意志をまったく持たない機械で, 外界からの刺激によって完全に支配されているとは考えにくい。しかし, また逆に, われわれは外界の状況とはまったく関係がなく, 外界からの刺激に何ら影響されることなく, 自分自身の自由意志によって完全に自由に生きていくことができる主体的存在であると, 自分自身を考えることもできないのである。われわれが生存していく過程の中で, 両者がどのような兼ね合いを保っているのかということについて, 今後も検討してゆかねばならな

いと考える。

#### 引用文献

- Allport, G.W. 1937. *Personality*. Rinehart & Winston.
- Fantz, R.L. 1961. The origin of form perception. *Sci. Amer.*, 204, 5, 66-72.
- Freud, S. 1926. *Hemmung, Symptom und Angst*. Internationale Psychoanalytischer Verlag.
- Guthrie, E.R. 1952. *The psychology of learning*. Rev. ed. Harper.
- Harlow, H.F. 1950. Learning motivated by a manipulation drive. *J. exp. Psychol.*, 40, 228-234.
- Harlow, H.F. 1961. The development of affectional patterns in infant monkeys. In Foss, B.M. (ed.), *Determinants of infant behavior*. Methuen.
- 波多野誼余夫, 稲垣佳世子, 1973, 知的好奇心, 中央公論社.
- 波多野誼余夫, 稲垣佳世子, 1977, 知力の発達, 岩波書店.
- Hebb, D.O. 1958. *A Textbook of psychology*. Saunders.
- Heron, W. 1961. Cognitive and physiological effects of perceptual isolation. In P. Solomon et al. (eds.), *Sensory deprivation*. Harvard University Press.
- Hull, C.L. 1943. *Principles of behavior*. Appleton-Century.
- Hull, C.L. 1952. *A behavior system*. Yale Univ. Press.
- 岩下豊彦, 1975, 共感の社会心理, 春木豊他編, 共感の心理学, 川島書店, 121—170.
- Jacobson, E. 1938. *Progressive relaxation*. Univ. of Chicago Press.
- Miller, N.E. 1948. Studies of fear as an acquirable drive: 1. Fear as motivation and fear-reduction as reinforcement in the learning of new responses. *J. exp. Psychol.*, 38, 89-101.
- 森口訓孝, 1965, シロネズミの慢性覚醒剤中毒による自発運動減退に及ぼす定時給食の影響, 第29回日本心理学会大会論文集, 126頁.
- Mowrer, O.H. 1950. *Learning theory and personality dynamics*. Ronald Press.
- Pavlov, I.P. 1927. *Conditioned reflexes*. Oxford Univ. Press.
- Schultz, J.H. & Luthe, W. 1969. *Autogenic methods*. Grune & Stratton.
- Skinner, B. F. 1938. *The behavior of organisms*. Appleton-Century.
- Skinner, B.F. 1953. *Science and human behavior*. Macmillan.
- Thorndike, E. L. 1911. *Animal intelligence*. Macmillan.
- Tolman, E.C. 1932. *Purposive behavior in animals and men*. Appleton-Century.
- Tolman, E.C. 1948. Cognitive maps in rats and men. *Psychol. Rev.* 55, 189-208.
- 八木晃, 1961, シロネズミの一般的活動性の変容に及ぼす諸条件の研究, 1. 定時給食の効果, 動心年報, 11, 93—102.
- 八木晃, 1970, 特殊飢餓状態における食物選択について, 現代心理学の課題, 160—167, 東

京大学出版会。

Young, P.T. 1945. Studies of food preference, appetite and dietary habit. 5. Techniques for testing food preference and the significance of results obtained with different methods. *Comp. Psychol. Monogr.*, 19(1), 1-58.

Young, P.T. 1946. Studies of food preference, appetite and dietary habit. 6. Habit, palatability and the diet as factors regulating the selection of food by the rat. *J.comp. Psychol.*, 39, 139-176.

Young, P.T. 1947. Studies of food preference, appetite and dietary habit. 7. Palatability in relation to learning and performance. *J. comp. physiol. Psychol.*, 40, 37-72.

Young, P.T. 1959. The role of affective processes in learning and motivation. *Psychol. Rev.*, 66, 104-125.

Young, P.T. & Chaplin, J.P. 1945. Studies of food preference, appetite and dietary habit. 3. Palatability and appetite in relation to bodily need. *Comp. Psychol. Monogr.*, 18(3), 1-45.

#### 参考文献

森口訓孝, 1981, 行動の形成と変容, 工学院大学研究論叢, 第19号, 81—96.

森口訓孝, 1983, 行動の変容と学習理論, 工学院大学研究論叢, 第20号, 155—165.